

【シンポジストより】

支援業務から見たコロナに対するアンビバレンス

亀山 美沙紀（一般社団法人公心会 あいち保健管理センター）

世界中の人々を震撼させている新型コロナウイルス感染症（COVID-19；以下コロナ）は、心理支援の場にも両価性を与えている。

例えば、人々の健康への意識が上がったことは、他の感染症への感染予防にもなっている一方で、他者に対しても過剰に感染予防を強制することによる衝突や、コロナ感染者に対する冷遇などの対人関係のトラブルを引き起こしている。

心理的支援での両価性を言えば、不安症・強迫症の症状における行動が、ある意味適応的な行動とみなされる場面も否定できないことがある。程度によっては外出の自粛や手洗いはむしろ推奨されるべき行動とされる。そのため、社交不安症のクライアントに外出を促しにくい場面や、不潔恐怖から強迫症とされているクライアントの手洗い行動が適切とされる場面が生じている。これらのクライアントに対してどのような支援を実施していくかは、支援者の力量が試され、今後も私たち支援者にはコロナを踏まえたうえでの支援の視点が必要となっていくのである。

支援者としての立場を抜きにしても、このような社会で過ごす私たちにとって、コロナがある生活への慣れや対策は不可欠である。コロナの「せいで」な出来事があった一方で、コロナが「あったから」な出来事も身の回りで起こっているかもしれない。

コロナに対して、安心し過ぎず、かといって心配過ぎずといった、楽観的でも悲観的でもなく「中庸」な態度で今後も向き合っていく覚悟が私たちには必要ではないだろうか。

新型コロナウイルスが及ぼした働き方への影響

柿崎 梢恵（岩手県南広域振興局）

緊急事態宣言が発令され、5月には交代制勤務が始まり、週の半分は在宅で勤務を行うことになった。

しかし情報漏えい防止の観点から書類やパソコンの持ち帰りはNGとされ、自宅から職場のネットワークにアクセスする権限も一部に限定されるなど、環境が十分に整っているとは言えない状況であった。私が在宅勤務でできたことは、昨年度予算決算額をエクセルで計算することのみだった。予定していた仕事が全くできないなか、「これでいいのかな」と思いながら黙々と作業をしていた。

通常業務再開後、保健所職員の業務の多忙化を受け、保健所以外の職員も検体搬送や患者搬送の当番が割り振られるようになった。国内の感染者が増えていくなか、昨年度から準備していたイベントは中止・延期を余儀なくされ、1から（0から）やり方を見直す必要が出てきた。

会議や講演会、研修、打ち合わせは、職場内外に関わらず殆どオンラインで行われるようになった。今まで、オンラインで外部の人と会議等を行う際、職場のパソコンではなく、個人の携帯電話を使わざるをえなかったが、庁舎内での需要が増えたことにより、職場に web